書評・紹介

「北魏佛教の研究」

横超慧日編

平井俊榮

中国南北朝時代に鮮卑族の拓跋珪が建国した北魏（三八六―五三四）といえば、その正史魏書が中国二十五史のうちで佛教や道教の宗教史である釈老志の立てられているほとんど唯一の国である。また『洛陽伽藍記』の記す造寺造像の盛大さや、有名な佛教遺跡雲崗や龍門の石窟などによって、北魏時代の佛教は中国佛教史においてきわめて特異な存在として従来から研究者に注目せられていた。じじつ、すでに塚本善隆博士に『魏書釈老志の研究』や『支那佛教史研究北魏篇』の専著があり、これらの同博士に代表される研究成果を通して、北魏佛教の研究はきわめて魅力的な研究分野であることを知らされてきたが、同時に、これらの北魏の造像銘類などの精緻な研究成果は、北魏佛教の研究というものがすでに完全なまでにしつくされてきたかのような錯覚をも研究者に与えていたのである。はたしてそうであったのか、本書はいくつかの問題提起を含めてその解明を真正面から果そうとした野心的な大作である。そのための視点として編者は、従来の縦の関係における教理史的な研究面からは顧慮されることの少なかった横の関係における同時代的な共通基盤に着目し、北魏を中心とせる南北朝時代の北朝に焦点を合わせてその宗教信仰の基盤を綜合的に明らかにしようとしたのである。

このような意図の下に編纂された本書の第二の特徴は、これが文部省科学研究費の助成に基づく共同研究の成果報告書であるという点である。したがって本書の執筆者は佛教教義学や中国の民族宗教・文化史一般に関する学者はもちろん、インド学・インド佛教史における専門家等、きわめて多岐にわたっていて、多くの角度から北朝佛教の綜合的研究を目差している。今日の学界を代表する第一線の学者多数の協力によってこのような研究が公刊されること自体、研究代表者でもある本書の編著者の学徳によるものであるが、毎年多数の佛教関係の綜合研究班に助成金が交付されているにもかかわらずこのような形で研究成果が報告されることの少ないのを思うとき、研究代表者の学問に対する誠実な姿勢に敬意を表するものである。そして、このような学的な誠実さこそ、本書のもつ最大の特徴であるといえよう。以下順を追って本書の概説と別評を試みたい。

本書は大別して二篇に分れている。第一篇思想篇には横超慧日「北魏佛教の基本的課題」、藤原幸章「念佛往生と他力信仰」、藤堂恭俊「北魏佛教における称名とその社会背景」、柳田聖山「ダルマ禅とその背景」、安藤俊雄「北魏涅槃学の伝統と初期の四論師」、富貴原章信「浄影慧遠の佛性説」、安井広済「維摩経の研究」、雲井昭善「法滅思想の源流」の諸氏の論文が収められ、第二篇文化篇には桜部建「世親の釈経論と菩提流支の訳業

とについての一考察」、道端良秀「大乗菩薩戒と在家佛教」、窪徳忠「北朝における道佛二教の関係」、牧田諦亮「北魏の庶民経典について」、滋野井恬「北魏時代の洛陽寺院に関する若干の考察」、佐々木教悟「インドと北魏とのあいだの佛教交流について」、福井康順「魏書釈老志「老」部（対訳）」の諸氏の論文が録せられている。本書におけるこの二部構成は、前者が北朝佛教文化の表層を示すものとすれば後者はその基層を解明しようとしたものと解され、執筆者ならびに研究課題も比較的均衡のとれた配置で、編者の周到な配慮が伺われる。

巻頭論文の「北魏佛教の基本的課題」は研究代表者による本書全篇の序論ともいうべきもので、まず北魏佛教研究の意義を強調し、後世日本佛教の主流をなしている禅宗及び浄土教の源流がともに北魏に存したこと、また凝然のいう日本佛教八宗の中国における起源はすべて北地にあることを指摘し、北魏佛教の研究なくしては唐代佛教の理解も完全になし得ぬとまで断じている。このような観点から北魏佛教の概説を試みているが、ここで提起されているさまざまな問題点が、のちにそれぞれの専門分野における各分担研究者によって如何に有機的な関連づけをもって論及せられているかが本書の成否を決定づけるポイントでもあろう。なお著者は北魏佛教を平城時代（三九八—四九四）と洛陽時代（四九四—五三四）に分けて初期の歴史的様相を概観したのち、とくに典型的に北魏佛教としての特色を発揮したものとして、地論教学における『十地経論』と、曇鸞浄土教の『無量寿経論註』の二書について、その歴史的意義を考察している。

つづく「念佛往生と他力信仰」「北魏佛教における称名とその社会背景」の二論文と「ダルマ禅とその背景」は、曇鸞の浄土教と達摩の祖師禅という、後世の佛教思想の展開に最大の影響を与えることとなった二大思想の思想的源流に関説したものである。曇鸞と達摩は、いわば北魏佛教の二大精華ともいうべき人であり、本研究においてもおそらく編者のもっとも意を注いだ所であろうし、また、それに答えるべく本書中においてもっとも精細な論考が連ねられている。「念佛往生と他力信仰」においては、曇鸞の浄土教は、廬山慧遠の浄土教が観想的な自力助念佛にとどまるものであったのに対しこれを否定的媒介とする明確な他力信仰の確立にあったと説き、自力から他力へという図式において中国佛教における浄土教の定着を解明している。つづく「北魏佛教における称名とその社会背景」はまず曇鸞が『無量寿経論註』において説く「去行」には念称併用と但称名の二態があることを解明し、とくに後者への指向を示す必然的な理由を詮索するとともに、口業によって称えられる佛名号について曇鸞の名号観を究明し、その成立の背景に僧肇の中観論理が使用されていることを指摘している。さらに北魏時代の人々が称名信仰を受容し成立させた社会的基盤について論究し、道教信仰の要素色彩の強い点を指摘している。北魏社会における称名行者の集団化についての指摘もきわめて興味ある問題であった。

「ダルマ禅とその背景」は質量ともに本書の圧巻である。本

稿には北魏佛教の中におけるダルマ禅というものを、たんに後世における禅宗の源流としてのみ位置づけるのではなくて、北魏佛教そのものの源初的な実態をその全体像において把握しようとする意識的な努力が払われている。そのために『続高僧伝』その他の資料の精緻な吟味によってダルマや慧可の伝記を再検討し、初期ダルマ禅の実態を明かすとともに、その背後にある北魏佛教の実態、とくに北魏末の習禅者たちの実態について詳しい吟味がなされている。そして般若を如何に実践するかがこれら習禅者たちの主張の特色であり、またそれがこの時代の中国佛教の関心でもあったと断じ、ついで曇鸞教学についても、その般若思想による論理化と実践的な深化への努力という点で同時代的な共通性と近似性を見出している。そしてこのような時代的な背景の下に成立した北魏佛教におけるダルマ禅の意義が、無相虚宗の般若の宗の発見とその実践的な昇華としての壁観にあったと結論している。中国に受容された佛教の体質というものを考える上で有益な示唆を与えるものであろう。

「北魏涅槃学の伝統と初期の四論師」において著者は、南地の涅槃学が専ら羅什学派によって組織された大乗般若学の立場から涅槃経を解釈しようとしたのに対し、北地の学者たちはむしろ実践修道の規範を説く好箇の大乗律典としてこの経を尊重したと推定しこれを論証している。北魏太武帝の破佛のもたらした末法意識が、北朝の佛教者をして涅槃経を護法の規範を説く大乗の律典として尊重せしめたことは充分に首肯されることである。また、かかる北地涅槃学の伝統が北地の四論師を媒介として天台智顗において一つの頂点に達したという著者の結論は、南地の涅槃学が摂山三論学派による般若思想との融即によって質的転換を遂げて行く過程と合わせ考えるとき興味ある問題である。

「浄影慧遠の佛性説」は隋の三大法師として吉蔵・智顗と並ぶ浄影寺慧遠の佛性説をその主著『大乗義章』について詳論したものであり、「佛性義」と「種性義」の二部構成としているが、後者は義章巻九にいう「二種種性義」の意で、慧遠が地持経の性種と習種とを釈したものである。吉蔵が『大乗玄論』で「地論師は理佛性と行佛性をたて、理佛性は本有であり行佛性は始有である」といっているが、この二種性を解したもので、慧遠においては性種が理佛性であり、習種が行佛性である。前者の佛性義については『大乗義章』の五門分別を詳論している。

「維摩経の研究」は維摩経の原典的研究で、チベット訳に基づいて従来の羅什訳に基づく伝統的な解釈を批判するという方法をとっている。一、「佛国品」の思想、二、漢訳の読み方について、の二部から成り、前者は経の中でも重要な「佛国品」について伝統的解釈の批判を試み、後者においては「佛国品」第一、「弟子品」第三、「菩薩品」第四、「文殊師利問疾品」第五からそれぞれ一文を例として引き、チベット訳と羅什訳を比較して、準梵語原典的な立場からすれば羅什訳がすでに中国の三論宗的な発展的理解を示していることを指摘したものである。

「法滅思想の源流」はインド佛教と中国佛教における法滅思

想の相違を問題とし、インド佛教においては専ら教団人に対する警告訓戒の意味をもって説き出されたのが、のちに至って教団破壊などの歴史的事実と結びつけられるようになったのに対し、中国佛教においてはむしろはじめからそれが北魏太武帝・北周武帝などの廃佛という歴史的事実に遭うことによって問題とされ、正像末三時説と結びつけられて語られることになった点で対照的であると結論している。ついで正像末三時説成立の経緯を述べているが、正法・像法・末法の三時説の形をはっきりとる経はほとんど見当らないといっている。

第二篇文化篇における最初の論文は「世親の釈経論と菩提流支の訳業とについての一考察」である。世親作の釈経論は原梵文の伝わるものが殆んどなく、その半ば以上は専ら北魏の菩提流支による漢訳という形態においてのみ流伝していることに着目し、現存の流支訳釈経論がインド佛教の世親の大乗経典解釈を知る上の主要な資料であると同時に、他方インド撰述の大乗論書の一形式が中国に如何に伝来受容されたかを知る一つのまとまった材料であると述べ、この両者に関連する問題として流支訳釈経論における「如実修行」の一句を抽出してその句の原語形態を追求、中国佛教者による理解を検討している。結論として「如実」が中観的理解において受容されたこと、原語にはない「相応」の語を付加しこの方に重点をおいた解釈がなされ、インド的背景を失なった漢語として理解されていることを指摘している。

「大乗菩薩戒と在家佛教」は、大乗経典や律典にあらわれる在家菩薩と出家菩薩、乃至菩薩僧というものの三国における差違や定義について詳しい論考をなしたものである。インドにおいては佛塔信仰を中心とした大乗佛教の在家信者が在家菩薩であり、この在家菩薩の帰依僧たる大乗佛教の僧伽が出家菩薩であったが、これが中国においては梵網経や法苑珠林などで大乗菩薩戒との関係において定義づけられるようになった点を綿密に考証し、さらに北周の廃佛後できた菩薩僧は長髪華冠の在俗相の出家で、これが出家菩薩＝菩薩僧という形で中国佛教にも定着していた菩薩僧の観念にあてはまらない特殊な存在であったことを強調している。

「北朝における道佛二教の関係」は、中国の宗教思想史を儒教を介在させた道佛二教の交渉史の過程とみる著者が、とくに北魏の寇謙之によって唱えだされた新天師道と、北周の廃佛後長安にできた通道観の二つをとり上げて道佛二教の交渉を論じたものである。新天師道が佛教的な要素を多くとり入れて道教を宗教として成立せしめた点、さらに、北周の通道観が道教側の資料からする限り道教偏重の傾向が全然認められないという指摘など、従来未着手の問題や通説の再検討を試みている点で興味ある論稿である。将来佛教史におけるこのような形の比較研究の必要性を示唆するものである。

「北魏の庶民経典について」も、従来とかく学問佛教の研究に偏しがちであった傾向に対し、佛教本来の姿である庶民の救済の根拠となった佛教の実態を解明し、その本質をつこうとする力作である。とくに、北魏時代に中国において撰述された所

謂偽経と称されるもののうち、宝車菩薩経、提謂経、浄土三昧経の三部について中国人社会に読誦され信奉された仏教経典がどのようなものであったかを論究し、仏教が中国人の仏教として日常生活の中に定着するすがたを提示している。

「北魏時代の洛陽寺院に関する若干の考察」は、洛陽における寺院集団の実態を精査したもので、仏寺造立者の検討と仏寺増加の次第とに分けて考察し、その基盤の大部分を上層社会に頼って繁栄した寺院集団の帰結を明示している。

「インドと北魏とのあいだの仏教交流について」は、北魏時代の求法僧と訳経僧の業績を軸として、インドならびに西域地方と中国との仏教交流を論じたもので、そこから仏教の中国的受容の形態や雲崗の石窟などにみる造型文化におよぼしたインドの影響についても関説している。

「魏書釈老志「老」部(対訳)」は、文字通り百衲本魏書をテキストとした釈老志のうちの「老」の部(道教)についての対訳である。百衲本の写誤、脱誤、錯簡についての校註も詳しく、研究者にとって益する所が大きいであろう。

このようにみてくると、本書は北魏を中心とした南北朝時代の北朝仏教について、全貌とまではいえないにしてもその種々相をさまざまな視点から論究したものとしてすぐれて有益な研究書といえるであろう。巻末に南朝と北朝を対比させた詳しい「南北朝仏教史年表」をかかげ、人名、地名、寺名・書名、件名、ローマ字の各件別の二十余頁にわたる詳細な索引が付けてあるのも親切な編集である。本書のようなすぐれた綜合研究の成果報告書が呼び水となって、今後、より強力なプロジェクトチームによる共同研究の推進がなされることが、結局、学界の水準を高めて行く重要なモメントであろう。そうした意味で、現行の綜合研究制度に対する批判の意味もこめて本書刊行のもつ意義は大きいといえよう。

(昭和四五年三月、平楽寺書店、A五版、三、八〇〇円)